

## クロージング 挨拶

ミヒヤエル・ライター

ご参会の皆様、三日間の最後にお話し申し上げる機会を得ましたことを、大変光栄に思っています。オーストリア風の英語でお話させていただきます。

この場をお借りしまして、まず私どもの共同主催者である大阪市立大学に感謝を申し上げます。特に山下先生には、万全のご準備をいただきましたことに感謝いたします。また、私どもスタッフにも感謝したいと思います。2年以上にわたって山下先生と一緒に準備してくれた北川さんです。このように皆様方にお集まりいただくのは決して容易なことではありませんでした。一時は、本当に三日間も必要なのだろうかと思ったこともありました。しかしこの三日間を通じて、この会議を満喫し、出席者の数が多いことに感動しました。

三日間のまとめをするつもりはありませんが、私なりの印象をお話します。質問攻めにしてしようというつもりではなく、私の印象をこのピンクの紙に書きとめておりましたので、それをお話したいと思います。

EUとユーロの経験から何が学習できるのかというこのテーマは、非常に時宜を得たものです。アジアをテーマとした国際会議に出席すると、ヨーロッパ人のスピーカーもいないし、ヨーロッパや欧州統合が議題でもないのに、開始後、長くても10～15分もすれば、誰かがEUの事例を引き合いに出されるわけです。たいていの場合、前向きな形で言及されるのは嬉しい限りです。

この三日間を通じて、EUの話というのは、広い視点から議論しなければならないということが分かったと思います。金融関連の政策、最適通貨圏、ユーロの役割、FTA、関税同盟、多国間主義、安全保障、和解などの問題が議論されました。また大学やシンクタンクが、この統合の過程でどういった役割を果たせるかという話もありました。

しかしながら、私の感触では、主たる関心は貿易問題と金融問題の研究に関する議論にあり、このことは、事実により正当化されるものです。しかし、ここで皆様にご留意いただきたいのは、EUはもはや単に経済的な存在ではないということです。歴史への言及もありましたが、我々にも、理想、目標を持つことが必要でした。これをビジョンと呼ぶべきかどうかわかりませんが、平和をヨーロッパにおいて広めていくこと、人権を守ること、法の支配を断行し、そして説明責任を果たすことを目指すとともに、市場経済の価値を確信しているのです。これらは、アジアであれヨーロッパであれ、統合のプロセスを議論するとき、忘れてはいけない不可欠な要素なのです。

ここで、ドロール元欧州委員会委員長の言葉を引用したいと思います。「域内市場と恋に落ちることはできない」というものです。このドロール元委員長の忠告は、現在EUが直面している難問にも関連しています。概念を狭くしすぎると、人々はそれに愛着を持たな

くなるということです。

また、EUは国際政治に、地域主義という大きな革新をもたらしたことを忘れてはなりません。国家主権を移譲し、国益を欧州全体で共有するとともに、国家が協力する体制を築き、それによって国際舞台における存在を高めていくということです。これは魅力的な考え方であるようで、ソフト・パワーとも言われます。今日のヨーロッパを見ていただきますと、EUに対抗する同盟を作るのではなく、ヨーロッパ大陸のほとんどの国々は、EUに入りたがっています。

したがって、今日のEUにとって最大の武器の一つは、加盟を拒否できるということであり、加盟に必要な基準をEUが自ら設定できることです。これはEUの持つ「変革の力」と呼ばれ、ヨーロッパだけでなく国際政治全般においても非常に興味深く、重要な進展であると思います。要するに、EUは、地域主義と多国間主義を土台にして進展しているのです。

しかしながら、EUとアジアでは大きな違いがあります。協力ひいては統合へのアジア的なアプローチ、ASEANの手法あるいはアジアの手法は、ある意味で逆であると言えます。アジアでは、国家主権の強化と、国内問題への不干渉が基本にあり、グローバル化の中にあっても二国間関係を志向しています。また、制度化を進めることには依然として消極的で、欧州裁判所制度を持つEUと異なり、裁判所で執行できるような法的拘束を受け入れる用意がありません。

また、私が時々自問しているのは、アジアで成立している数多くのFTAは協力の意思を示しているのか、それともこうした二国間の交渉は東アジアにおける対立関係を反映したものなのか、ということです。

これらが、私から見た制度や法律が中核的な役割を果たしているヨーロッパ的なアプローチとの違いの一部です。ヨーロッパが、法律と制度のアプローチを使用したのには多様性を克服するという、確固たる目的があったのです。

もう少しこの点についてお話し申し上げたいと思います。ヨーロッパは、アジアと比べて地理的結合性が強いために、アジアの友人たちは、ヨーロッパにおけるものの見方、文化、言語などにおける多様性を過小評価する傾向にあるという印象を受けるからです。「多様性の中の統一」が、欧州統合の中心思想である理由がおわかりでしょう。

私が、このような法の概念に言及しているのは、先ほど、アジアの統合が実現した場合のブルネイと中国の大きな差について議論されたからです。確かにその差は大きいですが、EUが設立された当初にも、そのような違いは存在しました。小さいルクセンブルクは、なぜ大国であるドイツやフランス、イタリアと並んでEUに入ろうとしたのでしょうか。それは、法的な枠組みとしての条約があったからです。それによって、小国であるルクセンブルグ、オランダ、ベルギーは、法律で守られるという保証が得られたわけです。

また、ヨーロッパには、協力を通して平和を確保し、この統合プロセスを起動させるための、共通の大義、いわゆるビジョンが必要でした。アジアには欠けている、共通に受け

入れられている、または受け入れられうるビジョンです。天然資源の確保、エネルギーの安全保障、環境保護、などが東アジアでの統合を進めるための共通の大義となり得るのでしょうか。

そのために、様々なビジョンを話し合うグループや賢人会議のような組織がありますが、東アジアの統合のために最も大事なビジョンはまだ根付いていないと思うのです。様々な取り組みについて適切な言及がされましたが、一つ足りない点があるとすれば、やや人工的であり、途方もないように聞こえることではないかと思えます。アジア版の「シェーマン宣言」を捜し求めるというタイムリーな議論のテーマも今回ありましたが、「シェーマン宣言」の文面をご覧になった方はおられるでしょうか。シェーマン宣言は、わずか2ページの簡単なもので、わかりやすい言葉で、明確なコンセプトが描かれています。

このシンポジウムをきっかけに議論が始まり、相互交流を通じて信頼が醸成され、地域間、そして地域内における信頼関係構築に向けた対話が始まることを期待しております。そして、私が大変嬉しく思ったのは、ヨーロッパと、日本、中国、韓国からのパネリストが肩を並べて参加したことです。同意できなくてもお互いに話を続けることが、共通の解決策を見いだしていく唯一の方法であるという最も重要な原則が適用されたのです。

この3日間の会議のフォローアップを考える際にも、この姿勢を忘れずに取り組みたいと思います。最後に、この会議の準備にご参加いただいた皆様方、そして最後までお付き合いいただきました会場の皆様方に感謝申し上げたいと思います。本当にどうもありがとうございました。